ホトトギスと包丁

むかしあるところに、テデとアバど、居であったど。子供、娘一人いだぁじ。それが、アバが死んだわけだぁ。それで今度しゃぁ、継母呼んでがったねぇ。オドまんだぁ、北海道さ昆布取りにあるがってあったど。今度ほれぇ、その娘、お藤であったった。それひゃぁ、「テデ、松前さ行ぐために、アバ言うこと聞いで、いれやぁ」って、こうして行ったたって言わった。したば、「あい」って。そのテデは北海道へ行ったべし、お藤とアバと家に居だどごで、そのわらしどご、好きでねしてはぁ、殺しにかかったたもんねぇ。それで、昔の水屋のきわさ、大きた釜すつけて、湯、ボンボンと煮だてて、そのお藤まんだ、遊びに行ったわけだ。「お藤ぃ、アバ用あるんて来いやぁ」ってよばったどぉ。「なに用あらったぁ」と来たどぉ。したば、「アバしゃぁ、今まで使った包丁、どぉっさがやったんだが、いねぇし、んがぁ、仕舞ったべぇ」って。「んがぇ、ねぐしたべ」ってしゃべるわけだ。お藤まだ、「おいだっけ、なぁんも使わねでぇ」って。「なんも、アンバァ、オメねぐしたべぇ」ってばっ

て、「なぁんも使わね」て言ったって。「お藤、んがぁ、ねぐした」っておごって、今度、お藤どごがんじえり掴めて、その煮立った釜さどっぷり入で、殺したわけだ。そこで、「死んだじ、どっさ、いげだらえがべがぁ」って考えたべし。戸口の際さ、穴掘って、そさそれ、死んだお藤どご、いげだわけだぁ。しばらくあったばぁ、テデ来たわけだぁ。さぁ、「お藤、どさ行ったばぁ。いねじゃぁ」って。したっけ、「お藤、これ、あっぱアバ来たどさ、これ行ったどして、なんも来ねでばぁ」って、したわけだ。したっけ、「んだってなぁ」って、オドまだしゃぁ、あがって飯喰って酒っこ飲んでしゃぁ、そうしていたば、「アバ居だどさ行った」っていうし、寝だべし、朝間に起きたば、「包丁どさいった、包丁どさいった」って、鳥っこ、ここさついて鳴くわけだ。「あいぃー」。不思議なもんだなぁ。なっしに、こうして鳴く」。やまんずに、口から血はくだけほれ、「包丁どさいった、包丁どさいった」っていうわけだ。オドまだ不思議に思ってだもしゃぁ、口からその鳥っこ、血出ったけ叫んで飛んでったわけだぁ。「包丁どさいった、ほうちょうどさいった」って、飛んでったば、それ今のホトトギスだって言わったね。それでとっぴんぱらりって言わった。

野村セツ（檜山　94歳）

〈解説〉

ホトトギスは、その鳴き声が死者の声であるとか、あの世とこの世を行き来する霊鳥とも考えられてきた。そうしたことから昔話によく登場し、「時鳥と継子」「時鳥と兄弟」「時鳥と小鍋」などが全国的に分布する。ホトトギスの鳴き声は、「包丁欠けたか、弟恋し」などとも聞こえるところから、包丁と結びついたのであろう。右に掲げた野村セツさんの話は、継母が夫の居ない間に先妻の子を、失った包丁にかこつけて沸騰した鍋に落として殺し、何喰わぬ顔で帰ってきた夫を迎えるが、ホトトギスが娘の不幸を知らせるという話である。継母には何らかの罰が加えられるのだが、ここではそれが落ちている。